

# 『望遠鏡』 編集発行人ナデージュヂンの 永遠・時間・歴史概念

下 里 俊 行

ロシア語ロシア文学研究 第46号 抜刷  
(日本ロシア文学会, 2014)

# 『望遠鏡』編集発行人ナデージュヂンの 永遠・時間・歴史概念

下 里 俊 行

## はじめに

1836年に『望遠鏡』誌に載った「哲学書簡（第1書簡）」は、ロシアの過去の意義を全否定したと見なされ、著者チャアダーエフは「狂人」として治療処分を受け、雑誌の編集発行人は流刑処分となった。本論は、この雑誌発行人ニコライ・ナデージュヂン（1804–1856）の時間・歴史観に焦点を当てて、彼が「書簡」掲載によって皇帝も含む雑誌購読者<sup>1</sup>に何を訴えようとしたのかを解明する<sup>2</sup>。

ナデージュヂンがキリスト教プラトニズムの枠組みで地上での「神の国」の実現をめざす世界史像を抱いていたことは既に指摘されている<sup>3</sup>。しかし、彼が、いかなる回路で超時間的イデアと有限な時間内の現象界とを結びつけていたのかという問題については明らかになっておらず、彼の思想における永遠のイデアと歴史的事象とがいかに接合されていたのかを分析することは、『望遠鏡』誌（1831–1836）の思想的方向を理解する上で鍵となる課題である。

ナデージュヂンの歴史観に関する先行研究は多くない。チエルノフは、彼を近代ロシア歴史学の先駆者一人として位置づけ、その方法論的特徴を実証主義に近いと見なし<sup>4</sup>、彼がヨーロッパ的啓蒙とともにロシアの民族的個性の重要性を同時に主張した点で1860年代初頭の土壤主義に似た問題意識をもっていたと指摘した<sup>5</sup>。ルドニツカヤも、彼の思想をヨーロッパ的啓蒙思想の「ロシア的変

しようとしたのである<sup>9</sup>。

ヴォルフ派は19世紀初頭のロシアでも公認哲学であった。例えば、当時のロシアの神学校での指定教科書だったバウマイスターの『形而上学』を見てみよう。そこでは、先ず理性的自由を確保する立場からイスラーム、ストア派、占星術の宿命論に反対した。そして事物の因果連関には偶然的可変性が含まれているから、そこには理性的な選択可能性の余地があると見なした。それゆえ、因果連関とはそもそも相対的必然性のことであると論じていた。また同書は、現前の世界以外の無数の諸世界の存在可能性を認めた上で、これら可能的諸世界の中から創造神が可能な限りの最善なものとしてこの現前世界を創造したと説明した。それゆえ、この現前世界における時間も、唯一絶対的なものではなく、二つの事象の先後関係が先にあり、それが事後的に構成された秩序である、という相対的時間論を提示していた。

I. 或るもののがそこから始まり、別のものが在ることを止めるような存在は先後関係と呼ばれる。これらの先後関係の存在において見られるものとは、  
1. 現にあり、現在と称される或るものである。2. この現在が在ることを止め、一つの可能性の状態へと移行する時、それは過去と呼ばれる。3. 非常に可能性のあるなんらかの事物が未だ存在を得ず、今後、生起することになるならば、それは未来と呼ばれる。[…] II. これらの諸事物の継起における秩序が、我々が時間と呼ぶものそれ自体である。[…] III. このことから、或るもののが始まり、別のものが存在することを止めるといった諸事物の継起がないところには、時間が〔構成され〕ないということは明らかである<sup>10</sup>。

この「構成される時間」とは対照的に、事物の運動を超越した実体として時間に先立つものが「永遠」であるとされたが<sup>11</sup>、それは自らが創造した世界の外部で休息する神の属性でもあった。この存在論的な構成的時間論の意義は、宿命論的決定論を排して、条件付き決定論を基礎づけ、人間に可変的自由の残余を認めることにあった。しかし、神が創造した現前世界は既に最善であるから、そこでの自由とは、未来に開かれた目的を目指す積極的自由ではなかった。

ラトン的イデアとともに有限な時空間内の諸事物をも現実的「存在」であると位置づけた<sup>17</sup>。彼によれば、「存在」を存立させる「神の力」は、不变存在と有限な諸事物の双方に関与しており、後者は「永遠でない」だけで、有限な諸事物もやはり「神の力」の作用を受けた「存在」に他ならない。このようにゴルビンスキイの「神」は、創造の神であるとともに有限な時間の内で作用する摂理の神でもあった。また彼の認識論の基本性格は、時空間内の対象を、認識の原因である共に存在の原型でもあるとし、両者を結びつける共通の源泉として「神の力」を前提とした有神論的な反映論・实在論であった<sup>18</sup>。また彼の神学においても、「神の叡智」が有限な諸事物にとっての永遠の原型とされ、それが現象界での諸事物に「存在」を与えるとともに、そのことによって有限な諸事物も逆に「神の目的」を志向することになるとされた<sup>19</sup>。つまり、有限な諸事物の「時間」の内に神的目的が予め内在的に組み込まれているのである。このような彼の神的叡智論は、東方正教会固有の正典「ソロモンの知恵の書」に由来するが<sup>20</sup>、教会公認のプラトンに依拠してカント以降の19世紀に宗教哲学的な時間論を構想した点に彼の特徴がある<sup>21</sup>。

こうして、ゴルビンスキイによって、被造世界のイメージは、ヴォルフ派的な予定調和的最善なものから、始原と終末をもつ有限な時間の中で永遠の神の叡知の導きにより神の目的に向かって運動するものへと変容し、この被造世界の時間的運動内にある有限な人間も神的目的に向かって神へと接近すべき存在として積極的に位置づけられ、永遠の神と有限な人生との合一を志向する近代ロシア正教の有神論的歴史観の基盤が形成された。

このゴルビンスキイの薰陶を受けたナデージュダンも、神学大学卒業後、「プラトンの形而上学」(1830年)で時間論に言及し、事物それ自体に帰属する不变のイデア的存在のあり方を「永遠」と呼び、それに呼応して運動する具体的形象としての地上的現象を「時間」と呼んでいた。

彼〔プラトン〕の考えでは、時間とは永遠（ト・アイオン）あるいは事物それ自体に帰属する純粹な不变時間が運動するところの形象であり、この純粹な不变時間〔永遠〕に対応する時間はイデアに対応する現象と同じような関

このような「現代」の芸術に対する高い評価の背景には、ギリシャ・ローマの古典古代が肉的物質に依拠し、中世が肉なき靈だけを尊重したのに対して、「現代」は両者を統一すべき段階であるという図式的な歴史理解があった<sup>29</sup>。彼によれば、この肉と靈とを統一する志向は、既に15世紀のルネサンスで顕在化したが、この志向を哲学に適用したのがカントの批判的思考であった。しかし、カントはこの批判的思考を内的経験の現象だけに限定し、外的現実に目を向けなかつたので一面的であった<sup>30</sup>。さらに彼を継承したフィヒテが、思惟だけを全面展開した結果、存在の否定へと逢着してしまう。これに対抗してシェリングが靈のイデアによって現実の諸現象を統一的に探究する方向へと逆転させた結果、ヘーゲルらによる哲学の新生活が始まった。こうして、「宇宙の有機的組成の批判的分析」すなわち「諸事物の永遠の秩序についての、知性が経験という碑石に刻み込んだ予測」として、経験的物質的現象の内に「存在の眞の意味、生命の根本的意義」を探究するための道筋が定められた<sup>31</sup>。

さらに、彼によれば、この哲学の動向と同じ方向性が歴史学研究でも始まったという。「それ〔歴史〕は、まさに今、自己本来の権能を手に入れ、存在の証人という古き名の正しさを証明する事業を始めている。それ〔歴史〕は、もはや、名前の無意味な列挙や、諸事件の散漫な流れの叙述に尽きるものではない。むしろ、現実から忠実に写し取られた人物達に代表される人類の長年にわたる形成の完全な物語であることをめざしている<sup>32</sup>」という。つまり、彼によれば、歴史とは人類という「存在」の「物語」である。それは、人々の人生を「物語として回想する」という意味で、ちょうど戯曲が「完全な歴史」であるのと同じであり<sup>33</sup>、このような「生活の詩的想像」こそ現代の啓蒙が目指すべき目標であるとされた<sup>34</sup>。

したがって、永遠のイデアの具象化という彼のプラトニズム的主題は、この論文では、人類史を神のイデアによる芸術作品として見るともに、その人類史に関する回想的物語としての歴史叙述を人間の内なる神的イデアによる芸術作品として見るという、「神による歴史」と「人間による歴史物語」の並行的二重関係として具体化されていた。そして、この二重関係の中に、「われわれ」ロシアの歴史も位置づけられていた。論文の最後で彼は、人類史共通の方向性においてロシアもその一翼を担う「偉大な全世界的使命をもっているはずである！」<sup>35</sup>と結論づけた。

係で解釈しているのである。さらに彼は人間の「神的要素」である自己意識による言葉の發出、發話の創造力について次のように論じた。

その〔人の自己意識の〕靈感に満ちた發話は、眞に人間的な發話となり、力強い創造主の御言葉に応える木靈となる。この御言葉とは、在らざるものスーザン・エリザベスを在る者として名づけるものである！——だから眞の人間的な文芸にこそ——民族の存在の最も確実な保証、民族の生命の最も美しい精華、つまり人類の美と栄光が存しているのだ！<sup>39</sup>

こうして、肉的物質を形象化させるというプラトニズム的イデアの創造力は、「無からの創造」に似た、言葉による命名としての創作として解釈された。だが、普遍的イデアを表現できる人類共通の普遍言語は不在であり、あるのはバビロンの塔に対する神罰としてバラバラに分裂した民族語だけである。このような理路によって人類史における啓蒙の普遍法則を通した摂理作用は、言語を媒介として民族単位に分節化される。その上で、あらゆる生命活動と同様に、諸民族の文芸活動も、呼吸と同じ内的充満の放出と外的刺激の吸収という、相反する方向の相互作用によって存立するとされた<sup>40</sup>。このような生命観の根拠も、やはりまた創世記（2.7）の神話におかれていた。

創造主は、我々に御自らの万能を分有させず、我々に生命を創り出す力を与えなかつたが、御自身が大地から塵〔肉〕を取り、そこに天上的息〔靈〕を吹き込むことによって、我々を生きた者として創造した。そして、この二つの対立する原理〔肉と靈〕の相互作用から、我々の人間的生命、すなわち知的生活、道徳的生活、そして（創造的）文芸的生活が始まったのである<sup>41</sup>。

つまり、人間は、創造神のように生命自体を創り出すことはできないが、生命的相似物として知的活動、道徳的活動、そして文芸創作活動を創出できるという。つまり、地上的真善美的形象の創造である。これが人類史の精髓である。さらに彼によれば、生命が肉と靈との相互作用によるのと同様に、文芸活動が発展する

### 3. 「哲学書簡」掲載の趣旨—高次の民族的個性の覚醒への呼びかけ

「哲学書簡（第1書簡）」には「我々は時間の外部に止まっているかのようだ<sup>44</sup>」という一節がある。この「時間の外部」という表現は、第1章で見たヴォルフ派哲学での神の属性としての永遠という意味ではなく、否定的な含意をもち、逆に「時間」のほうが肯定的価値を帯びている。この「時間」の価値性はナデージュデンの歴史観に合致する。シペートは、この「書簡」の主旨が当時の社会への宗教的・道徳的アピールであるということをナデージュデンは「正しく理解していた」と述べ、逆にゲルツェンがそう解釈して後に流布したような「反政府文書」という意図はなかったと指摘している<sup>45</sup>。

第三部の取調に対し、ナデージュデンは、第1書簡よりも前に届けられた第3書簡を先に読んで、そこでの人間の完成の最終段階として恭順、個人的意志の滅却、人間の外部に存立する律法への絶対忠誠といった主張に感銘し、その内容は完全に「私の信念」に合致していたと供述している<sup>46</sup>。また彼がチャアダーエフと共に共有していたのは、宗教を軽視した世俗社会と世俗主義的教育への批判、世俗学校の神学教師の使命感の欠如への批判、「ヨーロッパの眞の本質」であるキリスト教的恭順とは無縁の「偽啓蒙人」への批判であったという<sup>47</sup>。それゆえ、批判の対象には、世俗教養社会の「無信仰」だけでなく、ウヴァーロフの教育政策も含まれていた。

また編集者ナデージュデンにとって「第1書簡」での「ロシア民族の誇りへの侮辱」という要素は了解済みであった。彼は、取調に対し「民族的な自尊心に反対することは我が祖国の善にとって有益であるばかりか必然的ですらある」と断言した<sup>48</sup>。それは、キリスト教的恭順の対極にある自己愛に満ちた「愛国主義」は祖国にとって有害だという判断によるものであった。彼によれば、西欧での民族的個性の主張とは、民族の分離的孤立を意味しており、この民族的個性という「狂った高慢」のために西欧では騒乱が絶えないという<sup>49</sup>。一見して1836年の論文と正反対の主張に見えるが、彼の人類史の理論では、言語による民族原理はあくまで普遍的啓蒙の従属項であり、かつ各民族の発展には他者依存性と根源的個性という2つの原理の相互作用が不可欠であり、どちらか一方に偏して、

離的で孤立した民族の傲慢さに向けて浴びせられた侮辱は有益な成果をもたらすだろうと考えてしまったのです。なぜなら、この侮辱は、我々の卑小さこそが、何よりもキリスト教的恭順に立脚した道徳的・宗教的教育を通じて、我々がヨーロッパと対等だという意識からは得られないような、意義深きと力と尊厳を帯びるはずであるという結論へと不可避的に導くものだからです<sup>55</sup>。

ルースキイナロード

つまり、ツアーリを含まないロシア民族自体の価値は、ヨーロッパ諸民族と肩を並べて高慢になるのではなく、その正反対の姿勢、自らを低き者として謙るような恭順さにあり、それこそが人類が完成に向かうために不可欠な普遍的な姿勢なのである。それゆえ、ナデージュヂンの『望遠鏡』の基調は、現状保守的な志向というよりも、皇帝を頂点とした世俗秩序を超越した神の「摂理」の観点から、人類史とその不可欠の構成部分としてのロシア民族の歴史的営みを批判的に審判し、そのるべき将来像を展望するものであった<sup>56</sup>。

## むすび

ナデージュヂンのキリスト教プラトニズムの世界観では、時間とは永遠の模造であり、地上の現象界での時間とは永遠のイデア界である「神の国」に向かう上昇運動を意味しており、それが人類史の本質であった。従って、彼から見れば、「我々が時間の外にある」というイメージ、「我々の歴史」の欠如という表現は、「我々」が未だに神的永遠を目指すべき民族的自己意識をもっておらず、永遠を模倣すべき地上での「神の王国」に向かう普遍的な上昇運動の埒外にあり、上を眺めることなく横だけを見て、隣人の追従的模倣や、逆に隣人を見下す高慢な自足的態度に終始している状態を意味していた。彼は敢えて挑発的な「書簡」を『望遠鏡』に掲げることで読者達に世俗を超越した高次の宗教的民族意識の覚醒を呼びかけようとした。つまり、ロシアと西欧との間の文化類型の優劣という問題設定の地平を超越した、全人類の普遍的イデアの形象化という共通の目的に向かって各民族がそれぞれ独自の仕方で上昇すべきであると訴えようとしたので

形式として事物の性質と区別した点でカントを評価したが、カントが時間形式を物自体に帰属させず、その客観的实在性を否定したことを批判し、自らは時間を存在論的概念として再定位させようとしてヴォルフ派の定義を採ったと解釈した。Абрамов, А. И. Кант в русской духовно-академической философии // Кант и философия в России. М., 1994. С. 91–93. だがゴルビンスキイは、ライプニッツを形而上学（存在論）と論理学（認識論）を混同したと批判し、ヴォルフの時間概念を単なる経験論的概念であると批判していた。Голубинский, Ф. А. Лекции по философии и умозрительной психологии. СПб., 2006. С. 96, 116. それ故、ゴルビンスキイの存在論をヴォルフ派と見る解釈は彼のカント受容の契機を過小評価するものである。

- <sup>14</sup> Голубинский. Лекции. С. 158.
- <sup>15</sup> Голубинский. Лекции. С. 168.
- <sup>16</sup> カントとプラトンとの必然的関連については、アーサー・O. ラヴジョイ（鈴木信雄他訳）『観念の歴史』（名古屋大学出版会、2003年），205–206頁、を参照。
- <sup>17</sup> Голубинский. Лекции. С. 122.
- <sup>18</sup> Голубинский. Лекции. С. 149, 154. 彼は、存在と認識が一致する論拠を、神が人を錯誤させるはずがないというデカルトの議論に負っていた。
- <sup>19</sup> Гаврюшин Н. К. «Столп Церкви»: протоиерей Ф. А. Голубинский и его школа.(2008) [http://www.bogoslov.ru/text/299750.html] (2014年1月2日閲覧)
- <sup>20</sup>ユリウス・グットマン（合田正人訳）『ユダヤ哲学』（みすず書房、2000年），22–23頁。
- <sup>21</sup> 彼の世界史観は、下里俊行「あるロシア正教神学生の自己形成史：ニコライ・ナデージュヂンの出会いと読書」、『スラヴ研究』、第58号（2011年），109頁、参照。
- <sup>22</sup> Н. (Надеждин, Н. И.) Метафизика Платонова // Вестник Европы. 1830. № 13. С. 8.
- <sup>23</sup> Надеждин, Н. И. Литературная критика. Эстетика. М., 1972. С. 98.
- <sup>24</sup> 下里「ナデージュヂンによるプラトンの哲学体系の再構築とその哲学史的文脈」、19頁。マンは、ナデージュヂンが歴史の法則性の背後に「神の啓示」を見ていたと的確に指摘した（Мани, Ю. Н. И. Надеждин — предшественник Белинского // Вопросы литературы. 1962. № 6. С. 149–150.）が、その後の彼の論考ではこの論点への言及はない。
- <sup>25</sup> Надеждин, Н. Современное направление просвещения // Телескоп. 1831. № 1. С. 39.
- <sup>26</sup> Надеждин. Современное. С. 1. ここに革命的飛躍の反法則性という彼の判断の論拠がある。
- <sup>27</sup> Надеждин. Современное. С. 17.
- <sup>28</sup> Надеждин. Современное. С. 10.
- <sup>29</sup> マンはこの発展の原理の由来をシェリングに帰した。Мани. Русская. С. 76. だがその背後に神的イデアの具象化というプラトニズム的主題を読み取る必要がある。
- <sup>30</sup> Надеждин. Современное. С. 17–18.
- <sup>31</sup> Надеждин. Современное. С. 19. 従来、ナデージュヂンはシェリング派だと位置づけ

## Concepts of Eternity, Time, and History of N. I. Nadezhdin as the Editor of *Telescope*

Toshiyuki SHIMOSATO

*Joetsu University of Education*

---

This article analyzes the concepts of eternity, time, and history surrounding of N. I. Nadezhdin (1804–1856), with the aim of clarifying his motivations for publishing P. Chaadaev's "Philosophical Letters" in his journal *Telescope* in 1836. Previous studies noted that Nadezhdin had a Platonic-Christian vision of the future, in which humanity would have to seek the Kingdom of God just as Plato sought his ideal Republic. But scholars have not yet clarified how he connected his Platonic ideals of eternity with the historical phenomena of the world, and how his religious and philosophical views of the world related to his editorial policy for *Telescope*.

This study shows that Nadezhdin believed that time is the image or likeness of the divine eternity in the phenomenal world, which is assigned to return to its prototype. Consequently, the created beings of the world would gradually move toward the ideal world over a long period of time. Thus, from his perspective, real "history" is nothing but the movement of the world toward its eternal ideal. From this historical perspective, Nadezhdin endorsed Chaadaev's "Letters," which completely dismissed the value of Russia's past. In other words, Nadezhdin held that the Russian people still did not have a true national identity, which should seek divine eternity through the establishment of the Kingdom of God. He criticized the people of his own country for their mindset of always looking solely at their neighbors on the horizontal plane without contemplating their own ideal future. Therefore, he intended to shock his audience by publishing Chaadaev's "Letters," and thus call them to a spiritual awakening. Moreover, it should be emphasized that, in contrast to the perspective of the assumed cultural superiority of Western nations expressed in "Letters," he intended to emphasize how every nation must, in its own way, rise to realize the universal ideal of humanity. Thus, Nadezhdin set Russian journalism in a critical direction, which was inherited by the next generation of realist critics such as V. Belinsky and N. Chernyshevsky. In this sense, it can be said that his theoretical and practical activities determined the main direction that Russia's intelligentsia would follow.